

うすき
NIN 白杵の家

【応募者】 株式会社 汎建築研究所 九州事務所 井田良市／福岡市中央区那の津 1-3-5 17c175天神 802
TEL(092)712-4770／FAX(092)712-4849／Email:4649han@d2.dion.ne.jp

【作品または活動の概要】

- ・設計者：株式会社 汎建築研究所 九州事務所 井田良市＋浜村奈津代
- ・施工者：有限会社 新名建設工業
- ・敷地面積：1662.04㎡ ・建築面積：54.77㎡
- ・延べ床面積：193.67㎡ ・構造：木造2階建 ・型式：戸建住宅（一般住宅）

【作品または活動の特色】

祖父の代に植えた杉が伐り時を迎えているので、先祖の供養の為、この杉で家を作りたいと話があった。大分県臼杵市、有名な石仏を右手に見ながら杣道に入っていくと20町歩ほどの杉の森がある。建主が子供のころから枝打ちをして育てた美しい杉。建主の幼な友達の山師に木を選んでもらい、使う場所を考えながら伐り出す。建主の親戚に昔ながらの家造りを続ける大工がいるというので相談に行く。

敷地の隅に穴を掘り、荒土を入れ水を加えてねかす。近くの山でとれる竹を裂いて小舞竹を作る。

葉枯らしは木の油が抜けてよくないと山師は言い、貯木場に積み上げて半年乾燥させる。その間に実施設計を進める。自然素材にこだわり、継ぎ手金物もアンカーボルト

とかすがいい以外は使用していない。

臼杵の冬は結構寒い。地元の素材にこだわった家造りだが、建物の基本性能は上げておきたい。高断熱樹脂サッシュを採用したり、ソーラー発電をのせたり、新しい技術を取り入れている。

定年になってから東京の住まいをここに移すので急がなくてよいという建主の言葉に甘えて、設計も施工もじっくり時間をかけた。古い民家にある田の字型プランを基本に、シンプルな長方形にまとめた。建主の父君が高齢ながら矍鑠として健在、一緒に住むので引戸を多用しゆったりとした間取りとする。小舞竹に荒土を塗り、返し塗りを加えて荒壁を作る。室内はこれにしっくいを塗り仕上げる。外部はこれに断熱材を貼ってから通気胴縁を組み、ラスモルタルにしっくい塗りとした。床・天井とも伐り出した杉を挽き立てた杉板を貼っているの、この家は杉と土としっくいので殆ど出来ていることになる。

越し屋根のように小さな2階を載せた単純な切妻。自然塗料で塗ったこげ茶の杉としっくい白のコントラスト。石仏の観光客駐車場に面しているの、とにかく目立つ。観光案内所と間違えてくる人が時々いる。

ずっとここに在ったような家を目指したが、すぐに風景になじんだ。



①山に入るのに先立ち神社でお清めを受ける。このあと山の中腹にある小さな社に向かう。



②そこは先祖伝来の山の神を祭る聖地である。まずここで木を伐り出す報告を奉告する。



③山師と木を選びながら伐り出す。葉枯らしせず、そのまま貯木場に運ぶ。



④半年自然乾燥してから製材する。木くずとともに甘い香りが漂い木の精気が感じられる。



⑤設計図に沿って墨付けが行われ1本ずつ丁寧に仕口加工が施される。これはよく力を伝える金輪継ぎ。



⑥山から土を取ってきて、水を加え敷地の隅でねかせる。小舞竹も山の竹を裂いて作る。



⑦建方。昔ながらの御幣を立てて、掛け声を交わしながら積み重ねていく。屋根面の剛性を軸組みに伝えるための駒材が母屋にとりつけられている。



⑧事務所のスタッフも建方を経験。棟が上がったところで建主と一緒に記念撮影。



⑨杉の格子を開けると、ここから坪庭を通して父君の寝室へ直接入ることができる。



⑩大分の名のある宮大工が建てたという旧宅から松の床をはずし、化粧廻りをつけて和室の半縁天井を組む。書院の格子も洗いをかけて再利用。京間の旧宅に合わせてメーターモジュールを採用したので、ほぼそのまま再利用出来た。



⑪・⑫何層にも積み上がる小屋組みは日本建築の美を引き継いでいる。



⑬有名な臼杵の石仏はこの鳥居を左に進んだところ、ここは石仏の参道の入り口に当たる。鳥居の奥に見えるのが今回の建物。



⑭ゆったりとした切妻に越し屋根風の2階が載る。孫たちの雑魚寝スペースとして小部屋を設けた。

